

比喩的表現再考

小 山 久美子*

Figurative Expressions Revisited

Kumiko KOYAMA

Abstract

Figurative expressions are observed not only in poetics, literature, or politicians' speech but also in everyday utterances. How we interpret these expressions has been investigated, but it is still unsettled. This problem includes many important aspects, such as common ground, conceptual knowledge and so on. This paper examines the validity of classification of those expressions. The idea of narrowing and broadening proposed by Wilson seems to be rational. Meanwhile some examples of those expressions are shown. As a result, common knowledge or context is the most important factor and relevance theory is a plausible and meritorious explanation.

Key Words: 比喩, 共通の知識, コンテキスト, 関連性理論

1. はじめに

わたしたちのまわりには、常に広告がある。単にあるというより、溢れている。テレビをつければ、コマーシャルが流れ、電車やバスの中には中吊りの宣伝がぶら下がっており、話しことばであれ、書きことばであれ、常にさまざまな文句を耳にし、目にしている。それらの文句は、当然、選択制限に違反しない文や句が多い。しかし、中には文字通りの意味をたどると首をかしげるようなものもある。もちろん、広告の目的からすれば、人目を引くためにわざと選択制限に違反するような表現をするのは当然のことだといえる。しかし、広告だけがおかしな

*教授 英語学

文言を扱っているわけではない。ふだんの会話においても、よく考えるとおかしい表現を発している。たとえば、食べ過ぎたときに、「ブタになった」という。発話者は、人であるから動物である豚になることはあり得ない。あるいは、「今日、バーコードが怒ったんだ」と友人が話す。バーコードは、太さの異なる線で、製品に貼付されたり印刷されたりしている符号なので、怒ることはない。ところが、わたしたちはこのような会話を当たり前のように交わしている。そのような文言を見たり、聞いたりしたときに、果たして、それを字義的に解釈しているのかといえ、字義的解釈では、つじつまが合わず、真意を理解できなくなる場合が多いはずである。すなわち、私たちの認知機能は、そのような文字通りに見るとおかしい文句を瞬時に判断し、字義的ではなく、比喩的に解釈しているといえる。

比喩的表現は、詩や小説など文学において盛んに用いられ、研究されてきた¹。しかし、Gibbs (1994) が述べているように、比喩的表現は詩や政治家の文言にのみ見られるものではなく、先に述べたように、日常言語でももちいられている。瀬戸 (1997) は、比喩的表現の一つであるメタファーは日常生活の中に広く、深く浸透していると述べ、むしろ、詩的メタファーの方が日常言語のメタファーを応用していると言っている。そのため、近年は文学や哲学だけではなく、言語学、認知科学の観点からもこのような比喩的表現の研究がなされている。特に、聞き手が上記のような表現の文字通りの意味ではなく、本当に話し手が意図する意味の方をどのように解釈していくのが焦点となっている。ただ、その解釈の仕方についてはまだ明確に解明されているとはいえないのが現状である。本稿では、まず比喩的表現の伝統的な分類の妥当性を検討し、次に実際に用いられた比喩的表現を提示し、共通の知識やコンテキストの重要性を示す。

2. 比喩的表現の伝統的分類に関する問題提起

言語表現の技術としての比喩的表現には、さまざまな手法がある。直喩 (simile)、隠喩 (metaphor)、提喩 (synecdoche)、換喩 (metonymy)、反語法 (irony)、誇張法 (hyperbole) などは、よく用いられるものである²。

直喩は、日本語では「～のような」「～のごとき」、英語では“like”などが用いられる表現法である。これらの語句は直喩の指標³として機能している。(1) (2) は直喩の例である。

- (1) わたあめのような雲
- (2) 野菊のごとき君なりき

(3) He is like a hero.

直喩とともによく用いられるのが比喩の女王⁴といわれる隠喩である。「AはBだ」という文形式であったり、「目玉焼き」のような語句の形をとったりする。瀬戸（1997）は、隠喩を形式的に区分すると(4)のようなデアル型、(5)のような連結型、(6)のような形容詞型、(7)のような名詞型、(8)のような動詞型、(9)のようなセンテンス型に分けられるとしている。

- (4) 男は狼である
- (5) 仕事の山
- (6) 美しい理論
- (7) 東京砂漠
- (8) 新しい分野を開拓する
- (9) 一枚岩にひびが入った

(4) の場合、「AはBだ」の形をとり、「AはCだ」ということをいおうとしている。つまり、「男は（急に豹変して襲ったりするので）危険である」とか「男はこわい」などが話し手の意図である。このように説明しているのは Black（1995）で、隠喩は代置であるという代置説（substitution view）を唱えている。また、瀬戸（1995b）は、隠喩は類似性に基づき、抽象的でわかりにくい対象を具体的でわかりやすい対象に見立てることであるとし、野内（2007）も「未知のもの」「複雑なもの」「抽象的なもの」をよく知っているものに喩えて、それと同じようなものであると説明するプロセスだとしている⁵。いずれにせよ、上記のBとCの間に類似点を見つけなければならない点で、直喩よりひとひねりした技法である。

さて、ある事柄をよく知られた側面を用いて、その事柄の全体または別の側面をあらわすのが換喩である。モーツァルトといえば誰もが知っている作曲家である。(10)は作曲家の名前を出してその作品を指している。(11)の場合も、ハリウッドが映画制作で有名であることから映画産業を指している。(12)の場合は、全体で部分をあらわしている。パンクするのは、車全体ではなく、その一部のタイヤである。

- (10) モーツァルトを聴く⁶。
- (11) Hollywood is putting out terrible movies.
- (12) 車がパンクした。

しかし、(10)はモーツァルトの作品を指しているだけとは限らない。つまり、クラシック音楽を意味する場合もあるし、クラシック音楽のコンサートを意味する場合もある⁷。しかも、クラシック音楽の部分としては、モーツァルト（人）ではなくモーツァルトの作品である。二段階にスライドしているといえる。コンサートの場合はさらに段階を重ねている。ところが、(10)の文に関してはそのような説明がなされていない。

さて、隠喩が類似性に基づくものであるのに対し、換喩は部分と全体、原因と結果などの対象と対象の間の隣接関係に基づくといわれている。しかし、Gibbs (1994) が “At first glance, these two tropes [metaphor and metonymy]⁸ appear to be similar, for each describes a connection between two things where one term is substituted for another.”⁹ と述べているように、どちらも二つの対象についてどちらかが他方の代わりに用いられていることから、隠喩と換喩の関係について、換喩は隠喩の一種、あるいは下位類であるという学者もいれば (Genette, 1980; Levin, 1977; Searle, 1979)、換喩は指すものが横すべりしているだけで隠喩と似ていない (瀬戸, 2002) とか、正反対の原理によって生み出されると主張する学者もいる (Bredin, 1984; Jakobson, 1971)。最近では、換喩は隠喩と別ものとして扱われている。後述するが、換喩と隠喩を別ものにしなければならないか否かは、新たな考え方をすれば不要となる。

換喩と似ているといわれるのが提喩である。(13)の「酒」は酒全種類ではなく、日本酒のことである。また、よく用いられる例である(14)の「花」は椿やバラではなく桜である。(15)の「めし」とは米飯のことだけではなく食べ物全般である。

(13) 酒大さじ2を加える (料理番組)

(14) 花見に行く

(15) 明日のめしも買えない。

提喩の定義としては、意味世界における包摂関係、すなわち、類と種のカテゴリー関係にあるということである (瀬戸, 1995b)。日本酒は酒類の一種、桜は花類の一種であるというように、類で種をあらわしている。これは、ほかしの手法、カメラでいうズームアウトであると野内 (2007) はいう。類で種をあらわすだけでなく、逆もあり、ピントを代表例にあわせるズームインである (野内, 2007)。例えば、(15)の「めし」は食べ物の代表、つまり、プロトタイプである。

ところで、提喩は換喩と似ている。酒と日本酒、花と桜、食べ物とめしは、全体と部分ともいえる。そのため、提喩は換喩の一種で、喩えられる二つのものが部分と全体という関係に

ある場合は提喩という考え方 (Lanham, 1969) もある。しかし、佐藤 (1992a)、瀬戸 (1995b, 1997) は、換喩と提喩は独立したものとし、換喩は現実世界の中での隣接関係に基づく意味変化で、提喩は頭の中にある意味世界における包摂関係に基づく意味変化であると考えている。

たしかに、このような考え方をすれば換喩と提喩を区別することができるといえる。「一種」ということを分類基準にするならである。日本酒は酒の一種であるが、ハリウッドは地名であり、映画産業の一種でないことは確かである。しかし、酒と日本酒が意味世界における包摂関係で、ハリウッドと映画産業が現実世界の隣接関係ということに違和感がないかといえ、そうではないであろう。ハリウッドといえば映画のメッカ、映画産業のプロトタイプ的存在である。部分と全体といえないことはない。酒も現実世界のものであることに違いない。そうであるなら、後述するもっと平易な分類をした方が説明しやすく、説明しやすい方が合理的で妥当であると思われる。

他にも比喩的表現には、一つのことを大げさにいう誇張法がある。(16) (17) は日常でよく使われる表現である。

(16) 腹ぺこで死にそうだ。

(17) This book puts me to sleep¹⁰.

(16) は、非常に空腹の時に発する大げさな表現である。しかし、遭難して何日も飲まず食わずで飢餓状態が続いている場合や失神しかけている場合は、誇張表現とはいえ、字義的な意味に近い近似値表現 (approximation)¹¹ である。(17) も、単におもしろくない本といたい場合は誇張表現であるが、本当に眠りかかかっているなら近似値法、眠っていないが眠っているのと同じ状態になる場合は隠喩である (Wilson, 2004a, b)。

これらの表現も、前述の換喩と提喩のように、比喩的表現の研究書ではそれぞれ固定化して分類されている。しかし、各表現が固定的に分類されることはおかしなことである¹²。というのも、前述したように、コンテキストによって解釈が異なるからである。むしろ、一つの中核となる意味からどれくらい離れているのかという遠近で区別する方が合理的であるといえる。Wilson (2004a, b) は、縮小 (narrowing) と拡張 (broadening) を提示している。中核となる意味を円とすると、伝えようとする意味が (意図) がそこから広がっていくのが拡張、狭くなっていき、特定化されるのが縮小である。たとえば、次の (18) は縮小の例である。(18a) の drink は、液体を飲むことであるが、ここでは、液体といってもミルクやサイダー、コーヒーなどではなくワインやビールなどのアルコール類という特定の意味を伝えようとしている¹³。

(18b) の「飲み (に行く)」も「液体を飲む」という意味を絞り込み、「アルコール類を飲む」ということになる。

(18) a. All doctors drink.

b. 飲みに行こう

これに対して、拡張は中核の意味より伝えようとする意味がもっと広がりのある意味である。(19a) の violet はスマレという植物である。スマレは、ダリアやアマリリスに比べると小さい花である。そのような花はかわいい存在、つまり可憐ということである。すなわち、スマレという植物から、かわいい存在、可憐であるというように、もともとの意味から広がった意味を伝えようとしている。(19b) のブタも同様に、ブタは足が短く胴体が太った動物である。よく食べるからまるまると太っている。つまり、食べ過ぎて太ってしまったということを意図している。これは、「ブタ」の意味からの拡張である。

(19) a. She is a violet.

b. 食べ過ぎて、ブタになった。

前述の換喩や提喩も意味の拡張と縮小という考え方であれば相互の線引きをしなくても中核的な意味からの隔たりという観点でまとめられる。(10) のような例も、モーツァルト自身を中核とすればその作品は縮小となるし、クラシック音楽やクラシック音楽のコンサートを指すのであれば、拡張となる。モーツァルトを中心としてクラシック音楽が外円となり、その外側にクラシック音楽のコンサートがくる同心円で表せる。

誇張表現と近似値表現の場合も、この考え方でうまく説明できる。(16) の「死にそう」も、「死ぬ」が中核となる意味であれば、飢餓状態で死にかけているのは少しの拡張であり、空腹だけであれば大きな拡張となる。つまり、中核の意味を中心とした同心円状態になる。(17) の「眠くなる」も同様である。

さて、ここで問題となってくると思われるのは、何が中核となる意味かということである。最も適切であるのは、コード化された意味であると Wilson (2004a, b) は述べている。つまり、意味論的な意味である。これは、別な言い方をすれば、もっとも無標な (unmarked) 意味概念といってもよいだろう。無標ということは、もっとも一般的な概念といえる。たとえば、drink なら「液体を飲む」である。そこから、「ビールなどのアルコール類」を飲むといった

特定の意味に限定されていく。

3. 比喩的表現と共通の知識

縮小と拡張は、こまごまとした比喩表現の分類をまとめるのに役立つ。中核となる意味は無標であると上で述べたが、では、果たして、字義的でない有標の意味を誰もが同じように解釈できるのだろうか。そこで重要になってくるのが、共通の知識やコンテキストである。たとえば、(19)を、日本人が聞いた場合と西洋人が聞いた場合では、解釈が微妙に異なってくる。

(19) Her boyfriend is a pig. (彼女の彼氏はブタだ。)

日本語で「ブタだ」という発話の解釈としては、まず、「太っている」があげられる。家畜としての豚はみなまるまるとしているという経験的な知識をもっているからである。この経験的な知識は、聞き手が豚に関する百科辞典的知識へアクセスすると同時に、豚はよく食べるので太っているという活性化された想定としてもたらされる。そこで、ブタ*というアドホック概念を形成し、「彼女の彼氏は太っている」という、伝えようとする意図にたどり着く。このような考え方が Sperber & Wilson (1986, 19952) が唱える関連性理論 (Relevance Theory) である。ところが、英語圏では豚は太っているというよりは、むしろ、汚い (filthy), がつがつしているという¹⁴。つまり、ブタは汚いということ想定とし、ブタ*というアドホック概念を形成し、「彼女の彼氏は汚い」という解釈がもたらされる。この違いは、文化によるものと思われる。通常、豚は家畜として飼われている小屋の中で泥だらけになって、がつがつと餌をたべている。とてもきれいだとはいえない状況である。もちろん、がつがつ食べているので太っているが、体型はむしろ付け足し的な情報である。日本でも家畜としての姿がみられるが、それでもなお体型の方がからだの汚れや食べ方より無標の情報であるといえる。このように、文化がコンテキストとして重要な情報となる。それがなければ、解釈の違いはでてこない。比喩的表現の解釈は話し手と聞き手の共通の知識に依存しているといえる。

次の例文をみてみよう。

(20) 世界の安打製造機、次なる目標へ

これは、イチローが2000本安打を達成した翌日のテレビのフリップである。もちろん、安打

製造器とはイチローのことである。安打製造器のコード化された意味は、安打（ヒット）を生み出す機械である。機械は精巧で次々と仕事をこなす。「世界の」とは、「世界に通用する」、「世界的に有名な」ということである。つまり、ヒットを精巧な機械のように次々と打ち出し、どこの国でも知られているということ在意図している。この文句も野球の話であるとか安打が何かというコンテキストがなければ、字義的に解釈することもできる。しかし、世界的にも例が少ない2000本というヒットを打ったニュースがもたらされた後であるということ聞き手も話し手と共通の知識としてもつから、「世界の安打製造機」がイチローのことであると解釈できるのである。

次の例は、イギリスに住んだことのある人たちの会話の中での発話である。

(21) あそのケーキは、イギリスのケーキだ。

イギリスに住んだり旅行したりしたことのある人なら、この発話の意図はすぐにわかるであろう。イギリスは食べ物がまずいことは周知の事実である。もちろん、すべてがまずいわけではない。しかし、素材はいいが、料理の仕方がうまくないためにおいしくないのである。ケーキも例外ではない。サイズは日本の2～3倍はあり、甘さはそれを超えている。日本人にとっては、お世辞にもおいしいとはいえない。(20)の発話は、「あの店のケーキがおいしくない」ということを意図している。しかし、イギリスがどういところか、食べ物がどのようなのかを知らなければ、この発話を聞いても聞き手が話し手の意図を理解することはできない。イギリス(外国の)のケーキなのですばらしいものだ解釈するかもしれない。そうなると、コミュニケーションが成立しなくなってしまう。したがって、話し手と聞き手の共通の知識、コンテキストが比喩的表現の解釈には重要な要因となっているといえる。

4. 結論

比喩的表現には、さまざまな技法がある。それらの分類は固定的であった。そのため、一つの表現に複数の解釈ができる場合の説明が不十分であったといえる。本稿では、Wilson (2004a, b) に述べられているように、縮小と拡張という考え方をを用いて、合理的に分類できることを述べた。また、それらの分類においても、比喩的表現の解釈には話し手と聞き手の共通の知識やコンテキストが重要であることをみてきた。すなわち、コード化された意味概念だけでは、コミュニケーションにおいて聞き手は話し手の意図を解釈することはできない。話し手しか

比喩的表現再考

もっていない知識を比喩的表現に用いても、聞き手は話し手の意図を正確にとらえることができず、コミュニケーションは成立しない。

さて、比喩的表現における解釈には諸説があり、まだ明確に答えが一つに絞られていない。今後は、上述の共通の知識やコンテキストを用いてどのように聞き手が解釈できるのかについて、さらに検討をすすめていく必要がある。

注

- 1 比喩的表現は、レトリックであると考えられているが、本来、レトリックは弁論術、説得術であった。やがて、口頭による弁論よりも文体に関する方が重要視され、修辞学といわれるようになった。野内(2007)、佐藤(1992)、瀬戸(1997)を参照。
- 2 瀬戸(2002)は30項目に、野内(2007)はそれ以上に分類して説明しているが、本稿ではそれらすべてを考察せず、直喩、隠喩、換喩、提喩、誇張表現についてみていく。
- 3 野内(2007)。
- 4 瀬戸(2002)。
- 5 野内(2007)は、隠喩だけでなく、直喩、諷喩、擬人法も抽象的であったり、未知であったりするものをよく知っているものに喩えることだと述べている。
- 6 瀬戸(2002)。
- 7 Wilson(2004a, b)は、このような表現をカテゴリー拡張(category extension)と考えている。
- 8 []は筆者による。
- 9 Gibbs(1994), p. 321.
- 10 Wilson(2004a, b)。
- 11 199円を200円といたり、「あなたの顔は四角い」というのも近似値法である。4つの角が正確に90度の四角形でなくてもこのようにいえるからである。cf. Wilson(2004a, b)。
- 12 この点に関しては、小山(2006)で若干触れたが明確に主張してはいない。
- 13 Wilson(2004a, b)は、「酒などのアルコール類を飲む」ということからもっと縮小して、「酒などのアルコール類を大量に飲む」ということであると述べている。
- 14 Vega-Moreno(2004)が、自身の用いた例文の解釈について筆者と話した結果による。彼女は、この点についての指摘も説明もしていない。

参考文献

- Black, Max. 1995. "Metaphor." *Proceedings of the Aristotelian Society* 55: 273-294. (佐々木健一 編. 1986. 「隠喩」『創造のレトリック』. 勁草書房.)
- Bredin, H. 1984. "Metonymy." *Poetics Today*, 5: 45-8.
- Genette, G. 1980. *Narrative Discourse: An Essay on Method* (J. Lewin, Trans.). NY: Cornell University Press.
- Gibbs, Raymond. 1994. *The Poetics of Mind*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Jakobson, R. 1971. "Two aspects of language and two types of aphasic disturbances." In R. Jakobson (Ed.), *Selected Writings 2*, pp.39-59. The Hague: Mouton.
- 小山久美子. 2006. 「広告における比喩的表現」. *International Journal of Pragmatics* XVI: 15-27.
- Lanham, R. 1969. *A Handlist of Rhetorical Terms*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Levin, S. 1977. *The Semantics of Metaphor*. Baltimore: John Hopkins University Press.
- 野内良三. 2002. 『レトリック入門』. 京都: 世界思想社.
- . 2007. 『レトリックのすすめ』. 東京: 大修館.
- 佐藤信夫. 1992a. 『レトリック感覚』. 東京: 講談社学術文庫.
- . 1992b. 『レトリック認識』. 東京: 講談社学術文庫.
- Searle, John. 1979. "Metaphor." In A. Ortony (Ed.), *Metaphor and Thought*, pp.92-123. Cambridge: Cambridge University Press.
- 瀬戸賢一. 1995a. 『空間のレトリック』. 東京: 海鳴社.
- . 1995b. 『メタファー思考』. 東京: 講談社.
- . 1997. 『認識のレトリック』. 東京: 海鳴社.
- . 2002. 『日本語のレトリック』. 東京: 岩波書店.
- . 2005. 『よくわかる比喩』. 東京: 研究社.
- 谷口一美. 2003. 『認知意味論の新展開: メタファーとメトニミー』. 東京: 研究社.
- Vega-Moreno, R. E. 2004. "Metaphor interpretation and emergence." *UCL Working Papers in Linguistics* 16: 297-322.
- Wilson, D. 2004a. "Pragmatic Theory." Lecture handout at UCL.
- . 2004b. "Issues in Pragmatics." Lecture handout at UCL.